
機動戦士ガンダムSEED LEGEND

ゴリ夢中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムSEED LEGEND

【Nコード】

N0677H

【作者名】

ゴリ夢中

【あらすじ】

これは自分なりに機動戦士ガンダムSEEDDestinyから2年後のお話を書いてみました。また再び戦争が始まりその果てには一体何があるのか？

一話 始まり…(前書き)

初めてなので見苦しいかもしれませんがお願いします。

一話 始まり…

メサイヤ戦から22年がたちナチュラルとコーディネーターは共存にむけて歩んでいた。

そんな平和がまた消されようとしていた…。

「準備のほうはどうだ？ ダンテ。」

「はい。ほぼ完了しています。 オーデイン様」

「では… これより オープンへ攻撃を開始する。全MS発進。プラント及びオープンに通信を繋げ。」

そして22年の平和が破られた。

一話 始まり…(後書き)

次は主人公であるキラの息子の登場です。

第2話 チカラ

父親に似て少し幼さが残る顔。そして母親の強い目を持った一人の少年。コウ＝ヤマト。そう彼はフリーダムのパイロットでありヤマト隊長キラ＝ヤマトとラクスの子供で次男に当たる。そして今日はザフトの赤服を纏い配属先が決まる。

「コウ＝ヤマト」

「はい」

「本日よりエターナルヤマト隊に配属する。」

「はい」

上官の部屋を退室するとそこには父親であり今日から自分の上官となるキラ、そして親友であるローがいた。

「また、同じだな。よろしくコウ。」とローが言った。

「だな」緊張がとけて自然に顔が緩む。

「取りあえず今日はうちの隊はオフだから挨拶は明日ね。」キラが言った。

その後すぐローと別れ父さんとエターナルへ向かった父さんは理由はおしえてはくれなかった。

そこではある一体の機体があった。

「これが父さんと母さんからのプレゼントだよ。」僕を見て父さんが言った。

「名前は？」

「ストライクソウル。ストライクから名前をもらって父さんがつけたんだよ。」

ストライクソウルがいれば大切な物が守れるという強い輝きがあった。

「ありがとうございます。父さん」

「コウ 一つだけ守ってほしいことがあるんだ。死なずに絶対毎日帰って来るんだよ。待ってるからね。」

すごい重みがある言葉。だけど待ってくれる人がいる。

「はい 父さん」

ストライクソウルとの対面のあと家路に着いた。

第2話 チカラ（後書き）

次回は戦闘に入っていきます。

第3話 戦場へ(前書き)

最後にMSを説明します。

第3話 戦場へ

その夜母さんと妹のユウが家で待っていてくれた。ちなみ僕にはもう一人兄がいる。議員で毎日いろいろ大変らしくほとんど家にいない。

「ただいま戻りました。 母さん ユウ」

「ただいま ラクス ユウ」

「お帰りなさい キラ コウ」

「お帰りなさい パパ お兄ちゃん」

僕の母親である

ラクス・ヤマト前議長で30才で次の人に議長を任せ家庭に入ったと父さんに聞いた。今は歌手兼相談役として政治に関わってるらしい。

とりあえず今日のことを報告して家族4人で夕食をとった。その2時間後… 電話がなった…。

「コウ 招集がかかったすぐ準備を」

すぐ準備をすませ車に行くと母さんも車に乗っていた。

「コウ 急いでください。」

僕は直感的に理解したまた何かが始まるんだと…。

着いてすぐオーブが謎のMSおよび艦隊に攻撃を受けていること知った。母さんはすぐに会議室にこもり会議をはじめた。

その後作戦の説明のためヤマト隊のメンバーが集まった。

シン アスカ 父さんと互角に闘える数少ない人の一人でシンさんは僕を可愛がってくれた兄みたいな人だ。

あとはロー シンさんの奥さん兼指導係のルナさん その妹のメイリンさんがいた。

「自己紹介はあとでね。」 父親から隊長の顔になったキラが言った。

作戦は僕とシンさんが地球へMSで降り戦闘に介入その間にプラントは準備をし合流するというものだった。地球の近くまではエターナルで来た。パイロットスーツに着替え出動の準備をしていると母さんが今にも泣きだしそうな顔で必死に笑いながら

「…いつてらっしゃい 必ず帰ってきてくださいね」

「はい」

その後僕は部屋をでたのと入れ代わりで父さんが入っていった。

部屋では母さんの泣き声が聞こえていた。僕は操縦席につき静かにその時が来るのを待った。

「発進シーケンスオールグリーン 発進どうぞ」

シンさんのMSのインパルスデステニーが先陣を切った

「シン アスカ デステニー いきます」

そして自分だ…。

「コウ ヤマト ストライクソウル いきます。」

そして戦いの幕が切っておとされた…。

第3話 戦場へ（後書き）

ストライクソウル

ストライクとフリーダムのデータをもとに開発された新型MS。

おもに遠距離攻撃を得意とする。メインカラーは白と青でその姿はフリーダムを彷彿させる。

インパルスステニー

メサイヤ戦のあと大破したステニーを回収しそのデータをもとに作られたステニーの後継機。ステニー同様接近戦を得意とするが遠距離攻撃用の武装もあり状況により替えることが可能。

第4話 覚醒

「こちらシン。コウ聞こえるか？」

「聞こえます。シンさん。」

「今からオーブの状況、戦況を伝える。今オーブはアスランやウィルも前線で戦闘をしている。だからまずコウはウィルの援護をしてくれ。」

「了解」

「間もなく戦闘区域に入ります。シンさん。」

「わかった。じゃあまた後でなあ。」

そこでシンさんとの通信が切れた。

汗が流れ恐怖が徐々に気持ち支配し始めた。しかし敵MSがこちらを感知し攻撃してきた。初めてみる黒いグフ。

「よし。グフなら…」

しかしまるその動きはグフの動きではなくおそらくグフのスペックぎりぎりまで高められている動き。それでも何とか1機破壊した瞬間目を見開いた。

「パイロットがない…。」

これならさっきのパイロットがいてはありえない機動性のことも説明がつく。

「こちらコウ。シンさん、アスラン叔父さん。この黒いザクやグフにパイロットはいません。」

「よくやった。コウ。そうとわかればアスランさっさとやりましょ。う。」

「シン、コウ！

一体いつ来たんだ？」

「それより早く終わらせましょう。アスラン叔父さん。」

「そうだなあ」

「コウ、ウィルのサポート頼んだよ。」

「了解」

ウィルはアスラン叔父さんの子供で僕と同じ18才っていうことで小さい頃から仲がいい。そのウィルも父親と同じ道を選んだ。

ウィルの機体は母親から受け継いだアカツキである。アカツキの反応を見つけ交戦状態だったためサポートするためにウィルのもとへ行くと…

「うああああ」

「ウィル！！！」

僕も一瞬驚きを隠せなかった。
そこでアカツキの腕を切り間をとったMS。

「黒いフリーダム……」
だがまたすぐに間を詰め今度こそアカツキを完全に破壊するための
攻撃を繰り出そうとしている…

「ウイル下がって。」

アカツキが後退した瞬間にストライクソウルが向かい撃つ。だが……
「速い!!」

間一髪攻撃を避けそのまま後退したアカツキへ一気に加速した。
このままじゃウイルが死ぬそのイメージが浮かぶ。
「嫌だ。死なせたくない。」

その時何かが弾けた。

第5話 終焉（前書き）

忙しくて更新出来ませんでした。

第5話 終焉

その時頭の中がクリーンになった。

「殺らせない。ウィルを絶対守る。」

ストライクソウルはまだコウには完全に操りきれないためエンジンなどにロックをかけてある。それを解除すればストライクソウルは完全に覚醒する。しかしまだ完全に操れるわけでもないためどうなるかわからない。けどそんなこと構ってられない。

「全ロック解除。システムオールグリーン。」一気に加速する。後少してアカツキのパイロット席にビームソードが突き刺さる。「なら相打ちでも落としてやる。」

ウィルは小さく呟いた。

しかし次の瞬間黒いフリーダムの腕が切り落とされた。

一体何故？ ウィルは思った。だが黒いフリーダムの後にはコウの機体がまがましい殺気を放って飛んでいた。

そこからはコウと黒フリーダムの一騎打ちだった。

「ハアアア」

今度は左腕を切り落とすただが逆に今度は右足を切られた。

「くっ。」

ロックを解除したためかいつもよりも疲労が溜まるのが早い。

「ハア ハア ハア」次で終わらせなければ僕がもたない。

これで決める。

ストライクソウルの限界スピードまで加速していく…

黒いフリーダムとストライクソウルが交わった。

刹那の間…。ストライクソウルは左腕を切り落とされた。

黒いフリーダムは次の瞬間爆発とともに砕け散ったのを確認した。

「よかった…。」

そのまま僕は意識を手放した。

「コウ！」

ウィルは落下し始めたストライクソウルを受け止めた。

様子を確認するために回線を繋いだ。

「コウ 大丈夫かあ？」

応答はない。しかし何故か寝息が聞こえてきた。どうやら大丈夫らしい。

その後すぐアークエンジェルと回線を繋ぐことができ合流することができた。

第6話 宇宙（前書き）

次はコウを送り出したキラ隊が接触したお話です。

第6話 宇宙

一方プラントでは……

「キラ……」

そこには大怪我を負ったキラとその隣で手を握っているラクスとコウが椅子に座っていた。

一応危険な状態は脱していた。しかしまだ意識は戻ってはいない。

「何で、こんなことになってしまったのでしょうか？」

それはコウたちが出勤してすぐのこと……。

久しぶりにキラはラクスと夫婦水入らずの時間を過ごしていた。

「キラ、こんなお時間お久しぶりですわね。」

「そうだね。ラクス」

二人は紅茶を飲みながら話をしている。コウは自らが信じた道を歩み始めてまた一人巣立っていたのだと二人は感じていた。

だからといってコウが心配じゃないといえば嘘になるでもきつと大丈夫と二人で話していた時だった……。

「コンディションレッド発令
コンディションレッド発令
隊長は至急ブリッジへ。」
ヤマト

すぐにブリッジへ行くと…今オーブにいる黒いMSが攻撃を開始した。

「くっ。メイリンすぐにフリーダム発進シークエンスとエターナルの損傷の把握を。あとプラントに増援要請を。あとはラクスの手を聞いて。」

「はっ、はい」

着替える前にラクスに今の状況を説明した。

「わかりましたわ。キラ。あとはお任せください。」

「うん。」

そこでラクスと別れキラは着替えフリーダムへ。

「ヤマト隊長。発進いつでもOKです。」

「わかった。ありがとうメイリン」

「キラ＝ヤマト」

「フリーダムいきます。」

「予想どおりだなあ。後はたのんだぞ。ロキよ。」

「はっ」

「ロキ＝カルバ」

「クラッシュャー出るぞ。」

「」

そしてキラと黒いMSの戦いが始まった。

第7話 堕ちた剣

「くっ……………」

今の戦況はよくない。防戦一方だ。出る直前にシンからの通信のおかげで黒のMSにはパイロットがいないことは知ってるがエターナルを守るで精一杯だ。

その時ある通信がこちら側に送られてきた。

「我等はアヴェンジャー世界に復讐するものだ。キラ・ヤマトお前には一番苦しんで貰おう。」

そこで通信が切れた。

そして目の前には見たことのないMSがいた。その姿はまさに死神だった。また通信が繋がった。

「ワタシの名はロキだ。キラ・ヤマト。ここでフリーダムには消してもらおう。」

「君達は一体何がしたいんだ？」

「ふん、そんなことは簡単だよ。」

「また世界を混沌の闇に招きたいだ。」

そこで通信が切れいつの間にか黒いザクやグフがいなくなっていたことに気づいた。

そして戦いが始まった。

「ハアアアアアア」

隙のないロキの攻撃がキラを襲う。

しかしそこは経験からある程度は余裕があった。

「やめるんだ。そんなことをしたって何の意味もない。」

キラの説得が続くしかし…

「そつちは無くてもこつちにはある。

それに人を殺すのは楽しいしね。」

そこでキラ自身も説得は無理だと思いSEEDを覚醒させた。

だが……

本気になった二人が激突して僅か10分…

ラクスも驚いていた。

そこには四肢を切り取られ完全に沈黙しているフリーダム。

片やほぼノーダメージの謎のMSがいた。

「さてフリーダムのデータもとれたし止めを刺せないのは悲しいけどオーディン様の命令だからなあ」

そして謎のMSは闇の中に消えた。

その後すぐにフリーダムを回収しキラを救出し今にいたる。

「うっ…うっ…んラクス？」

「キラ大丈夫ですか？ユウお医者様を。」

ユウは急いで病室を出て行った。

「ラクス…。僕は負けたんだね…。」

「はい。フリーダムは修理不可能と判断され破棄されました。」
「そう。ラクス…。ゴメンね…。」

キラが泣いて謝った。

「いいえ、キラ貴方がここに生きて帰ってきて下さっただけでも嬉しいですわ。」

そんな会話がちょうど終わった頃ユウと主治医が来た。

「もう大丈夫です。後はリハビリを頑張りましょう。しかしまだ当分はMSには乗れないと思います。」と言って主治医は部屋を退出した。

「後は評議会に任せてゆっくり休んでくださいな、キラ。」

その時…ドアが開いた。

「キラさん。」

シンが評議会への報告も兼ねてさっき戻ったらしい。でもシンの顔は真っ青だったのを見たキラたちは笑い一方シンは狐につままれた顔していた。その頃オーブでもキラが負け今さっき目を覚ました。

という連絡が入った。

コウは戦いが終わり気を失っていたがすぐに目を覚まして父さんのことを聞き心配したがオーブに残り情報収集をしろとの命令がありプリントには戻れなかった。

しかし父さんは大丈夫だとゆうことで安心して任務に戻った。

第8話 再び前線へ

父親の無事を確認した後オーブの首長との会合に参加するためにある部屋へ行く途中ウィルと会った。

「コウ、大丈夫か？」

「まあ、何とかね。」

「そうか」

「じゃあまた食事の時に」

「うん」

たわいもない会話の後会議室に赴いた。

「コウ＝ヤマト」

「入ります。」

そこではついさっき着いたイザーク隊長とディアッカさんがいた。

「ではそういう方針でプラントも援助致します。」「よろしく頼む。後キラにもよろしく」

「わかりました。カガリ代表。」

「コウ お前はとりあえず情報収集のついでにオーブの護衛をしろ。お前の機体の整備パーツを持って来ている。わかったな。」

「はっ」

「それでは失礼します。ガガリ代表。」

イザーク隊長とディアツカさんはすぐにプラントに戻った。

それから1週間がたった。

「コンディションレッド発令　コンディションレッド発令
守備隊発進　　至急ガガリ代表は指令室へ」

「一体どうした。」

「また黒いMS20機とUNKNOWN　MSが1機です。」

「カガリ代表。オープンチャンネルで回線が入っています。」

「わかった。　繋げ。」

「こんにちは」

カガリ代表、

ラクス元議長　　我等はアベンジャー

再び世界を再び闇へ導く者だ。我等はオーブとプラントに対し宣戦布告させていたどうか。さあ、再び開戦と行きましょう。それは戦場で。それではまず手始めにオーブに送らせてもらった部隊を相手に頑張るといい。ではこれで失礼。」

「発信場所は？」

「妨害されて特定不可能です。」

「ちっ アスランの隊をすぐに出せ。」

「カガリ代表！」

「コウもすぐに出れるか？」

「はい」

「よし、アークエンジェルにアカツキとストライクソウルはつんである。アークエンジェルと共に前線に出てくれ」

「はい」

アークエンジェルに行くついでに発進シークエンスが終わり出る寸前だった。

「お久しぶりです。 マリューさん ムウさん。」

「そうね。 コウ君」

「それじゃあ急ぎましょう」

「アークエンジェル発進」

「じゃあ コウ君

ウイル君 頑張つてね。」

はい（二人同時）

「コウ＝ヤマト

ストライクソウル行きます」

「ウイル＝ザラ

アカツキ出ます。」

二人の機体は戦場へ向かった。

第9話 砕けた正義

「ハアアアアア」

アスランは既に数機は黒いMSを墮としていた。そこへ通信が入った。

「初めまして。アスラン、ザラ。私はロキというものです。フリーダム同様ジャスティスにも消えていただきましょう。」

「一体お前たちの目的は何なんだ。」

「勿論、再び世界を混沌の闇へ招きたいだけですよ。」

「くっ……」

初めて見るMS。

説得にも耳を傾けてくれない。

「やるしかないのか。」

そう呟くとSEEDを発動させた。

一方コウやウィルは黒いMSを相手に応戦していた。

「くっ……」

さすがに多いなあと二人は思っていた。だが前みたいにフリーダムみたいな強い機体がない分まだ二人は余裕がある。

「コウ 何だか変じゃないか？」

「何が？」

周りを見ると黒いMSが撤退を始めていた。そこに緊急通信が入った。

「マリユールさん

どうかしたんですか？」

「ジャステイスのシグナルがロストしました。ここからはザラ指令官の搜索へ変更します。補給が必要な機体は補給をしてから搜索を開始してください。」

ウイルの顔は真っ青だ。

「艦長 アカツキの回収をお願いします。僕はこのまま搜索へ移ります。」

「わかったわ。」

それからすぐジャステイスのコクピットを発見した。さいわいにも軽傷で脳にも異常はないということだった。今はまだ眠っている。その傍にはカガリ代表とウイルがいた。お見舞いに来たけどそっとしておくほうがいいだろと思い。部屋を後にした。

次の日アスラン叔父さんは目を覚ました。

「カガリ話したいことがある。

ウイルとコウも呼んでくれ。」

「わかった。

でもまだ安静にしてろよ。」

そう言つてウィルたちに集合をかけた。

「まずおそらく俺が負けたのはフリーダムを墮した奴だ。あいつらは俺やキラの戦闘データを基に新しいMSを造ろうとしているらしい。」

アスラン叔父さんが話終わったあとカガリ叔母さんが話し始めた。

「そうか……」

その話は後で話そう。私からは昨日の夜、正式にプラント最高評議会からラクスが再び議長の職に着いた、という文章が届いた。

そのあとラクスと話合つた結果オーブ軍とザフト軍とで新たに一つの組織を作ることになった。明日はそのことに関しての協議のためにプラントからこちらに来る。コウとウィルはその護衛として参加してもらおう。」

「はっ」

二人は軍人の顔でその命令を受けた。

「それでは明日は頼む。それじゃあ今日はゆっくり休んでくれ」
誰もいないことを確認してつと、

「はい カガリ叔母さん」

今日は疲れた。今までの戦いのレポートや作戦をまとめていたらもう深夜だった。

「今日は寝よう。」

そして眠りについた……。

第10話 歌姫再び (前書き)

あまりにも誤字、脱字が多かったので書き直しました。すみません。

第10話 歌姫再び

「コウ、起きろ。」

「……何ですか。」

起きると何故かカガリ叔母さんがいた。時計を見るとまだ5時。いつもならまだ寝ている時間だった。

「どうしたんですか？」

「いや…実はラクスタたちが来る時間を伝え忘れてた。ごめんなあ。」

「いえ、大丈夫です。それで何時なんですか。」

と聞くとカガリ叔母さんの顔色が変わり、

「あと、1時間位だ。」

カガリ叔母さんが苦笑いを浮かべている。一方自分は開いた口がふさがらなかつた。

「というわけで急いで準備してくれ。」

ウィルはもうアカツキの最終調整してる。ストライクソウルもウィルと一緒に最終調整してるから心配するな。じゃあ急げよ」

と話が終わるとほぼ同時に部屋を出た。

ちなみに時間は5時30分。

とりあえず直ぐに軍服に着替えそのまま発進直前のアークエンジェルに飛び乗りそのままロッカーへ向かった。そこには機体の調整を終えたウィルがいた。

「コウ、悪かったなあ。お詫びの代わりに機体の調整はやっておい
た。」

「ホントだよ。」

と談笑しているとブリッジのラミアスさんから通信が入った。

「間に合ったみたいね。それじゃあ、二人ともそろそろコクピット
で待機しててね。あと5分ぐらいで出撃してもらおうから」

「了解。」

そして5分がたち艦長から命令がきた。「ストライクソウル、アカ
ツキ 発進シークエンスを開始します。」

「コウ君、ウィル君頑張つてね。アカツキ、ストライクソウル発進。
」

「はい。」

「システムオールグリーン、ストライクソウル、アカツキ発進どう
ぞ。」

「コウニヤマト、ストライクソウル、いきます。」

「ウィルニザラ、

アカツキ 出る。」

発進後、直ぐに通信がアークエンジェルから入った。「二人はラク
スさんたちが乗った母艦の護衛をしてもらいます。二人はそのまま

待機していてね。」

「了解しました。」

それから数分がたった。

「二人ともラクスさんたちが乗った戦艦がプラントを出たという連絡が入りました。もう間もなく大気圏に入るらしいわ。あとは頼んだわよ。」

「了解。」

通信を終えて直ぐに戦艦が見えた。

しかもその戦艦は最近開発された新型の戦艦で名前はフロンティア、父さんも開発チームにいたため名前だけは知っていた。でも今はとりあえず……

「こちら、ザフト軍ヤマト隊所属、コウニヤマト。これよりオーブ代表 ウィルニザラと共にオーブまで護衛させていただきます。」

「こちら、フロンティア艦長 キラニヤマト、了解。」

「……………えっ?」

確か父さんはプラントでリハビリ中のはずでも画面には父と母が映っていた。

すると母さんが、

「それでは、また後で会いましょう。」

コウ。」

と一方的に通信を切られてしまった。

とりあえず、まず任務に集中しようと気持ちを入れ替えた。

フロンティアでは、

「ラクス、コウにあの子が来てること教えなくて、良かったの？」
と艦長室で会話をしていた。

「はい、コウもキラと、とても似いて不意打ちに弱いので反応が楽しみですわ。」

ラクスはニコニコしてこちらを見ているがキラは苦笑いをして、そのあと遠い目をしてコウごめん…とつぶやいた。

とりあえずは、特に異常もなくオーブに着いた…だが直ぐに通信が入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0677h/>

機動戦士ガンダムSEED LEGEND

2010年12月2日02時36分発行